ふれあい新聞

（１０号）　平成元年　４月　５日　　田中野田町内会

“わが郷土を語る”　（その８）

明治生れのパイオニア「原孝一」さんのこと

中尾佐之吉

いまは昔、と言っても約７０年前、大正８年のことである。田中野田バス停の南の原商店のある場所に精米所がつくられた。当時としては、最も近代的な内燃機関と言える“ガスエンジン”を動力とした精米所である。当時数え年２５才の原孝一さん（原好幸さんの父君）の創業になるものである。そしてそれは、私の幼児の頃である。そのエンジンはガス発生装置を動かすことから始めねばならないので、エンジンの始動にも時間がかかるばかりでなく、回転も今のように早くなかった。それでも精米所の稼動する日は、私は、精米所をおそるおそる覗いてリズミカルに動くエンジンに終日見ほれていたものである。

この精米所のなかったそれ以前は各家庭でカラ臼によって米をついていたから、動力精米所は田中野田地区ばかりでなく、今地区でも機械化加工場の第１号であったろう。

また、ここでは米つきばかりでなく、い草の肥料として使われていた。満州（中国東北地方）から輸入の大豆粕玉の粉砕の機械も備え付けられていた。

この精米所は、昭和初期“電動機”と還流摩擦式精米機”の普及されるに及んで休止された。

それにしても、この地区で米麦と、い草の栽培しか考えていなかった時代に、外国製の高価なエンジンを導入し精米工場を始めた青年実業家原孝一さんの『時代を先取りしよう』と言うパイオニア精神に感銘をうけるのである。

この事業を始めようとした動機まして採算や経営状況を知る由もない。原さんにしてみれば、機械化、近代化が徐々に進みみつつある時代の動きをとらえ地域の為に役立とうとして、いち早くこの事業を始められたのであろうと思われる。採算の事よりも、新しい時代を切り開いていこうとする原さんの開拓精神が、今の私にも伝わってくるのである。

常に、「前を向いて歩くんだぞ」と言われているような気がする。皆んなの後について行って間違いのない平凡な暮らしに満足するのでなくリスクを恐れず、新しい時代に向けて自らをためそうとする明治人のチャレンジ精神に改めて敬意を表したい。

左掲の写真は（原好幸さん提供）大正１０年に撮られた原精米所である。私にとってはとてもなつかしい。そして向かって左側の人物が当時の美青年原孝一さんである。

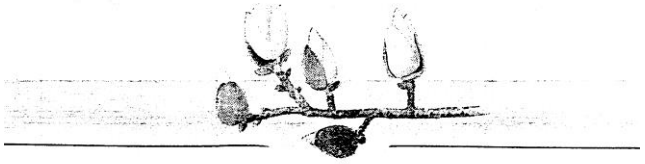
“ 公会堂の移転が完成した ”

懸案の公会堂の移転がさる１月１６日に完了しました。皆さま方のご協力を感謝申し上げます。なお、昭和天皇即位を記念して建設されていた今までの公会堂も１月１７日に取り壊された。公会堂は昭和と共に生まれ、昭和と共に亡くなったわけです。

仮設公会堂の建設と旧公会堂の取り壊しに要した諸経費は次のとおりです。

項　　目	金　額	摘　　要
プレハブ運搬費	55,000	新日本機材㈱
仮設公会堂組立費	260,000	小松ハウス㈱
〃　内装工事	398,000	原　建　設㈱
〃　電気工事	140,000	中国電気工事㈱
〃　照明器具	13,790	赤木電気㈱
〃　移転諸費	12,480	
旧公会堂解体工事費	370,000	原　建　設㈱
合　　計	1,249,270	

なお、公会堂移転に伴う補償金は 6,478,600円で１月３０日受け入れていますので併せてお知らせします。（町内会長）



“ 梅の花占い ”

和気督祐

この話は、私がまだ現役で勤めていた頃の話であります。

経済農協連を停年退職されたＫさんは、ある肥料会社に再就職されて、肥料の販売推進で私の所へ時々訪ねてこられた

Ｋさんは非常に雑学に長けた人で、肥料推進のかたわら色々の事柄について巧みな話術で常に我々を魅了させていました。その話しの中の一つで、梅の花の咲き方による天候占いは、熊本のある地方に伝わる話だそうで、紹介して見ます。

①梅の花が一面下向きに咲いた年は、雨がよく降りまた曇り空が多い。即ち天候不順、日照不足不作の年となる。

②一斉に上向きに咲く年は日照時間が多い。

③横向きに一斉に咲いた年は、平年作で安全性高い年。

④ダラダラ咲く年は、不安全で台風の心配もある。

以上、花占いで確率は８割以上ということです。

ちなみに我が家の梅の花を見ますと、ほとんど下向きに咲いており、占いの①の天候不順、日照不足の年となります。当たらないことを祈るのみです。

さて、貴方の畑の梅の咲き具合は如何ですか？。

《 ふれあいの窓 》

“哀れ消えゆく豊饒（ほうじょう）の田園”

武山　晃三　（６組）

一月七日午前六時三十三分、国民悲しみの中先帝陛下は崩御あそばされた。ご咋秋病床の陛下から「今年の稲作はどうか」との御懸念のお言葉が洩れてきて、人々は粛然としたのである。それは、わが国が豊葦原（とよあしはら）の千五百秋（ちいほあき）の瑞穂の国なることを先帝陛下が常に思われていることに他ならない。然るが故に毎年お田植えと収穫を御自ら行われることによっても拝察されるのである。

昨今、当、田中野田地区に於ても都市計画による区画整理工事が進められている。縦横に延びる道路、しかし、地域発展のかげに従来からの豊饒なる田畑はその姿を消しつつある

小鮒追いし小川、さざ波寄せる緑の蘭草田、黄金波打つ稲田等、幼い頃の思い出は忘却の彼方に消え去って行くことであろう。

生存の根本である食を他国に依存し、生殺与奪の権を放棄近い将来、世界的食料危機が懸念されている現在、これは田中野田一地区に限らず、猫の目農政の不備は全国的なものとなっている。食糧不足で、餓死続出している国のことを思う時、あわれ日本人が札束を握ってあてもなき食を求めてさまよう姿だけは見たくないものである。